



# Mission : 1

---

mission:1



熱く乾いた風の欠片が、引き結んだ口の中でザリザリと嫌な音を立てる。

ちっ

匍匐しながら目の前の砂に唾を吐いた。

奇襲攻撃。

敵は補給部隊だった。

不足気味の武器弾薬を得るには格好の相手だ。

落日を背に仕掛けたのはよかったが、数軒ほど固まった土の家を巧みに防御陣地とした敵は序盤の劣勢を凌ぎ、日没を前に戦闘は膠着状態に陥りつつあった。

浅く掘った掩蔽壕から顔を覗かせ敵を窺う。

逆光での狙撃は困難ゆえの所作だったが、それでも不用意に頭を出すような真似はしない。

自動小銃の先にヘルメットを載せ、離れた場所で見え隠れさせているのはまだ幼さの残る少年兵だ。ちらりと振った視線に、白い歯を見せニコリと笑った。

単発的に撃ってきてはいるが、狙いは粗い。

奴等にとっては日没前の今が一番戦い辛く、此方にはこの上なく有利な状況なのだが、いかんせん残弾が心もとない。皮肉にも相手は弾など腐る程持っている。

奴等を15km先の本隊へ合流させる事は、この一帯での彼等の生活圏が喪われる事を意味していた。

何としても今、叩いておかねばならない。

勝期は、太陽と共に地の底へ沈もうとしていた。

◇

「どうする？レトウ」

小隊指揮官のアリが男に尋ねた。

爆撃で焼かれた顔。ケロイドの中の双眼は闘志を剥き出しにしていた。

「夜を待つ」

東洋人風の男は、砂風に目をやられるでもなく敵陣を睨んでいた。

「増援が来るぞ。そうなればアラーの神でも勝てぬ」

「俺に任せろ」

男は短く答えその場を離れていった。

やがて日が沈み、敵陣からは迫撃砲を交えた派手な斉射が始まった。

奇襲が効を奏し、血の気の多い敵は最初、やたらと乱射するしか能が無いかに見えた。

それが次第に冷静に、方角を見定めた攻撃を加えてくる。

地下陣地を持たぬ彼等は少ない戦力を更に広く薄く敷陣せざるを得なくなった。

徐々に死者、負傷者が増えてくる。

刻一刻と敗色が濃くなり、アリの顔にも焦りと疲労が見え始めた。

「もう持ち堪えられん、レトウはどうした！ 何をやってる！？」

「それが… 何処にもいません」

「なんだとお！！」

怒りのあまり部下を怒鳴り飛ばしたアリが敵陣に向かい仁王立ちとなった、その時。

不意に砲撃がやんだ。

自動小銃の発射音がひとしきり鳴り響き、嘘のようにピタリと止まる。

…やがて闇が人影を一つ、彼等の陣地前に吐き出した。

銃を握り締め、アリがゴクリと唾を呑んだ。

「殺ったぜ」

片手のナイフから血をしたたかせた男、堀川 烈が笑った。

凄絶な笑顔だった。

## Mission : 2

---

mission:2



予想もしないタイミングだった。  
つかの間の休息に憩う集落へのいきなりの敵襲。  
警戒を怠っていた訳ではなかったが、見事に裏をかかれた。  
取るものも取らぬ迎撃戦では戦術もなにも無かった。

血みどろの戦闘は既に4時間を越えていた。  
敵はおよそ500、二個中隊規模で襲いかかってきた。  
小高い岩山を背にしているとはいえ、此方は女子供を含めても200に充たない。  
老人さえ銃をとっているが実質的な戦力は一個小隊程度でしかなかった。  
先日の奇襲作戦で獲た武器弾薬の豊富さと地形に助けられ何とか防御線を保ってはいるが、絶対的な戦力差は戦闘が長引く程、立て籠る側に不利に働いていた。

退却すべき場所は無かった。  
クルド人自治区を出、迫害と闘いながら新天地を求めて荒野の彷徨を続けた彼等一族が、やっとたどり着いた安住の地こそが此処であったのだ。

◇

「アッバス！ 何やってる、早く弾もってこい！ アッバス！！」

ゴツゴツと隆起した岩陰で応射しながらカシムが叫んだ。  
銃弾が岩を削り、破片が容赦無く彼の顔を叩く。  
周囲は仲間の躯が飛び散りヌルヌルと足に絡んでいた。

いきなり引き倒されたカシムの目に足が一本、棒きれのように立っているのが映った。  
膝から上が綺麗に吹き飛んでいる。

！？

ヒュルヒュルという風切り音と同時に、至近距離で迫撃砲弾が炸裂した。  
部下が三人、血煙となってけし飛んだ。

「前ばかり見ていると命が幾らあっても足りんぞ」  
「レトゥカ」

レトゥこと堀川 烈は土埃まみれの顔でニヤリと笑った。  
向こうの岩棚まで下がれとカシムに告げると、彼は重そうな背囊を肩に掛けた。

「お前は どうする！？」

地に伏せたまま顔だけ上げて、カシムが叫ぶように聞いた。

「出前にいく」  
「デ・マ・エ？」  
「デリバリーサービス、ニッポンのな」

カシムが心底、訳が判らないという顔をした。  
後でと言い捨て、堀川が素早く岩陰を出る。走っている筈なのに足音一つ聞こえなかった。

やがて空気の半分が銃弾と化したかのような猛烈な斉射と共に敵が突っ込んできた。  
この間の敗北に怒り狂っているのが手に取るように判る。どの顔も血に狂っていた。

カシム達が潜む岩棚まであと10m…

パッと土煙が上がり、耳を裂く轟音が立て続けに鳴り響いた。

視界が晴れると、辺り一面が敵の死体で埋め尽されていた。  
堀川の仕掛けた対人地雷が瞬時に30人以上をミンチに変えたのだ。

「…なんて奴だ…」

あいつが敵じゃなくてよかったと、カシムは心底思った。  
そうしている間にも、戦いは終盤に差し掛りつつあった。

## Mission : 3

---

mission:3



「怯むな！ 撃て！ 神の御加護は我等にこそある！！ 奴らを一人残らず殺せっ！！！」

指揮官であり部族の長でもあるアリの、戦場の轟音に負けぬ怒声が味方の背を押していた。

あれだけ蓄えた弾薬が底を尽きかけていた。

長時間の激戦のせいもさることながら、死闘を繰り広げる彼等の頭には弾薬の、戦力の温存などという考えは微塵もなかった。

一弾も残さない

一人も残さない

一人も還さない

彼等は自らの死を省みる事をしなかった。

敵を殺す、死んだ仲間よりも多く殺す。

ただそれだけに凝り固まっていた。

「弾は幾らも残っちゃいない。この一角を守ってられるのもあと僅かだ。どうする？ アリ」

アリの傍らに寄り添うように立った堀川が口を開いた。

呟くような声だったが、戦場の爆音の中でもちゃんとアリの耳に届いていた。

「それを言う必要があるのか、レトウよ」

「…」

「奴らを殺す。弾が無ければ喰らいついてでも殺す。そして一族の誇りと共に死ぬ。難しい事はない」

血にまみれた醜い顔が笑う。

サッパリとした顔だった。

「永い旅路が終わり、また別の旅が始まるのだ…」

いい顔だと堀川は思った。

その気はないが、ここで死ぬのも悪くないな、と。

脇から殺到してきた三人を一連射で倒すと、堀川の銃の弾が切れた。

銃身を握り鋭く振ると、宙を走った銃が後ろから襲ってきた男の顔に銃床ごとめり込んだ。

眼球を垂らした男がどうと崩れ落ちる。

「器用だな、お前」

危うく襲われるところだったア리가呆れたような顔で言った。

「弾切れ、だ。あとはコイツだけ」

堀川は腰の鞘から大型の山刀を抜いた。

「レトウ… お前は逃げろ」

ア리가ボソリと言った。

「何だと」

「お前は一族の者ではない」

「アリ… 貴様…」

「判らない奴だった。たいした報酬も求めず我々と共に闘い、あまたの敵を倒した。今なら判る。お前は戦士だ。アラ一が我々の元に、遠い東の島の偉大な戦士を呼び寄せたのだ。そして今、お前をアラ一に返す時が来た」

堀川は無言でアリの言葉を聞いていた。

「この国からも去れ。我等にはシーアもスンニも関係無い、ましてや正義と称して他国を踏みにじるアメリカなど頼りたくもない。ただ一族が平穏に暮らせる土地があればよかったのだ。レトウよ、お前ならあんな連中と組むか？」

アリの視線が遠くへとさ迷った。

その目に、小さな影が二つ映った。

急激に大きくなる。

## Mission : 4

---

mission:4



地平線の彼方に浮かんだ二つの影は、みるみるうちに黒い翼を持つ鳥の姿になった。  
アリが顔をしかめる。

「どうした？」

つられて空を見上げた堀川の顔に動揺が走った。

「ホーネットだと？ アメ公がどうして」

中高度で一直線に侵入してきた二機の戦闘爆撃機は、彼等の真上で黒い物体を二つずつ投下して一気に頭上を飛び去った。

4つの物体はすぐにパラシュートを開くと、ユラユラと降下してくる。

「あれはなん…」

アリが言い終わる前に、襟首を鷲掴みにした堀川は脱兎の如く走り出した。

しかも敵の真正面に向かって。

凄まじいスピードで走り寄る二人に照準を合わせられぬ敵兵は、いたずらに弾をバラ撒きながら堀川の山刀に両断されていった。

「どう…した…何処へ…戻れレトウ…レトウ！！」

殆んど引きずられるように引っ張られながらアリが叫んだ。

更にスピードが増した。恐るべき脚力だった。

尚も5人を斬り捨てると、敵兵に馬乗りになられたカシムに近寄り山刀の一振りでも敵の首を斬り飛ばした。笛のような音を立てて吹き上がる血しぶき越しに堀川が怒声を浴びせた。

「たて！ 死ぬ気で走れっ！！」

敵陣を突破した堀川とアリ、遅れて走るカシムの三人は、そのまま砂漠へ向け走り続けた。

「と…まれ、レトウ…止まらないと…」



疾走の勢いをそのままに、堀川はアリ共々頭から砂に滑り込んだ。

カシムも訳の判らないまま二人に続いた。

そして。

岩山の頂点で閃光が走り、敵味方全てを巻き込んで山全体がもう一つの太陽と化した。

地に伏せた三人が凄まじい熱を感じた次の瞬間、大気が渦を巻いて岩山の方へと吹き荒れた。

嵐はいくらもせずに吹きやんだ。

砂だらけの顔をあげたアリとカシムは、呆然と空を仰いでいた。

歪つな形の巨大なキノコ雲が成長を続けている。

「なにが…」

「気化爆弾だ。恐らく強化型の新タイプだろう。噂には聞いていたが」

「戻らねば」

立ち上がろうとするア리를堀川が制した。

「無駄だ」

「邪魔するな！ 私は一族の長だ、ゆかねばならん。あそこには深い穴もある、幾人かは生きているかも」

「気化爆弾は周囲の酸素を燃やし尽す。熱と爆風さえ避けていれば普通なら大丈夫かも知れんが、あんなバケモノみたいな奴じゃ何処へ隠れても窒息だ。諦めろ」

**ザンッ！**

拳を砂に叩きつけ、アリが吠えた。

**ウオオオオ～！**

# The Last Mission

---

The Last mission



イラク中央、アメリカ軍基地。

夜気をサーチライトの光が幾条もないでゆく。

鉄条網のフェンス脇、ライトの死角となる僅かな場所に黒くうごめく三つの影があった。

ワイヤーカッターで鉄条網を切り開くカシムの後ろで周囲を警戒するのは、顔を真っ黒に塗ったアリと堀川。三人の表情には何の感情も表れていない。

一方的な終結宣言をだした後も、イラク軍残存兵、スンニ派民兵、サウジアラビアやレバノン、アフガニスタン等から流れ込んで来た過激派武装勢力の間断無いテロに晒されてきたアメリカ軍拠点は警戒嚴重だったが、警備システムの裏をかくのは堀川にとって兎戯に等しかった。

「あと少しだ、アリ」

「急げカシム。そろそろ車が戻ってくるぞ」

アリは巡回している警備兵をしきりに気にしていた。

「アリ。この闘いには栄光も部族の未来も無い。生き残った者の単なる復讐だ」

そう呟いた堀川を、闇の中で白い目がギロリと睨んだ。

「俺はただの押し掛け傭兵さ。だがな、政治だの利権だのとは関係無く闘ってきたお前に惚れて今まで来た。ここから先は、お前の忌み嫌っていたテロと何も変わらんぞ」

いいんだな…

低く話す堀川に、無表情のままアリが答えた。

「無意味な死だ。旧政府の残党ごと始末された我々はただの巻き添えだったのだ。あんな兵器まで使いおって…」

「今じゃこの国は絶好の実験場、あの新型爆弾も、記録は何処にも残らんし報道もされないだろうよ」  
「だが私は知っている、アラーム。それを奴らに知らせめるのだ。これは復讐ではない、ジハード（聖戦）なのだ」  
「そうか」  
「お前はなんのために戦ってきた？ レトゥよ。護るべき者はいないのか」

鉄条網が切り開かれ、真っ先に穴をくぐった堀川が言った。

「そんなものはない。戦場だけが俺の生きる場所だ。だが少し疲れたかもな。生きて還れたら久し振りに弟の顔を見にゆくとするよ」  
「そうか、『砂漠の悪魔』と言われたお前にも弟がな」  
「その名で呼ぶな。俺の名は…」

近くの警備兵を三点射で倒し、共に突撃する二人に言い放った。

*CROW (鴉) だっ！！*

やがて基地内が爆発音と銃声に満たされる。  
最後の戦いが今、始まった。

(了)